

大学在学中の私費留学生の時間的展望と 「日本留学」の意味

茂住和世*

本稿は私費留学生にとっての「日本留学」の意味を検討するため、彼らの時間的展望を明らかにすることを目的とした。白井（1997）の文章完成法を用いて調査を行った結果、留学生はポジティブな現在指向性を持ち、過去に対する「後悔・無関心」、未来に対する「希望」「目標の実現」という時間的態度は、白井の日本人学生調査結果との有意差が認められた。現在指向は充実感、自己効力感と高い相関があると園田（2003）が明らかにしている。また溝上（2008, 2010）は青年期の自己形成プロセスには他者の承認が不可欠であるが、近年の日本人学生は他者との関係性の中で試す自己形成活動を十分に行っていないと指摘している。以上のことから、日本留学はネガティブな過去をリセットし、日本生活において自分を試し他者から承認されるという、社会との相互作用によって自己効力感が高まり、自己形成が進んでいくプロセスであると捉えられた。

キーワード：ポジティブな現在指向性、自己効力感、他者の承認、社会的相互作用、自己形成プロセス

Time Perspective of Privately Financed International Students in University and the Meaning of Studying in Japan

Kazuyo MOZUMI*

The purpose of this article is to investigate the meaning of “studying in Japan” for privately funded exchange students, by making clear their time perspective. As a result of using the Shirai (1997) sentence completion method to survey foreign students, they were found to have the positive present directed orientation, and a significant difference was confirmed when compared to the results of the Shirai’s survey of Japanese students in terms of time attitude- “regrets / disinterest” in the past and “hope” “realization of goals” for the future. Sonoda (2003) has shown that present directed orientation is strongly related to sense of fulfillment and self-efficacy. And Mizokami (2008, 2010) has shown that consent from others is vital to the process of self-formation during adolescence, and has indicated that in recent years Japanese university students have not been conducting a sufficient amount of self-developing activities through interaction with others. From these points, it is suggested that foreign students came to Japan to reset their negative past, tried themselves to get the consent from others in their life of Japan, and made their self-efficacy higher. It means that “studying in Japan” is the process of self-formation by social interaction with the consent from others.

Keywords: the positive present directed orientation, self-efficacy, consent from others, social interaction, self-formation process

1. はじめに

2011年5月現在、日本にいる外国人留学生数は138,075人、うち私費留学生は124,939人とその約9割にあたる。出身地域別ではアジアからの留学生が129,163人と93%を占める。したがって、私費留学生のほとんどがアジアからの留学生と言える。私費留学生とは文字通りすべての留学費用を自己資金で賄う者のことである。これに対し、国費留学生は大使館等の推薦を経て選抜されて来る留学生で、彼らの留学費用はすべて日本国が負担する。つまり、日本政府が渡日・帰国費用を支払い、授業料は無償で、生活費等に対する一定額の給付も行われる。渡日後は宿舍を提供され、文科省が用意した予備教育機関において日本語などを学んだ後、日本の大学等へと進学する。進学先は予め確保されており、日本語等の学力が日本の学校で学ぶに十分なレベルに達していなくても、必ず進学できるということが国費留学生の特徴である。要するにすべてのルールが敷かれているのである。一方、私費留学生は費用負担だけではなく、日本語学校を選んでビザを申請し、渡日後は自分でアパートを借り、日本語学校で日本語を学びながら大学入試を受ける、というすべてのプロセスを自分で切り拓いていくしかない。入試に通らなければ帰国するか専門学校へ行くしかない。また、私費留学生に対する奨学金は現状ではまったく不十分であり、授業料や生活費などを工面するためにはアルバイトにも従事しなければならない。

しかし、アジアの若者が日本留学を私費で賄っていくのは容易なことではない。中でも最も高額な経費が掛かるのは私立大学に4年間通う場合であろう。日本学生支援機構の調査によれば、4年制の私立大学に通う自宅外生の年間の学費や生活費の合計は約238万円であるという。単純計算しても大学卒業までに1,000万円近くの支出となるわけだ。日本人の家庭の学生であっても、これだけの費用を賄うのは非常に

大変なことである。にもかかわらず、上記留学生のうち私立大学の学部には在籍している者は57,475人と、大学（学部）に在籍している留学生の83.4%に及ぶ。その一方で、近年は円高が続き、アジアの留学生たちは自国からの仕送りも目減りする状況が続いている。それでも日本に行くという意思決定をした私費留学生たちは日本に何を求めて留学したのか。高額な経費をかけて日本留学することは彼らにとってどのような意味があるのだろうか。

今後も我が国の留学生受入れにおいてそのほとんどを私費留学生が占めることは間違いない。1983年の留学生10万人計画当初は国費：私費の割合は1：4であったが、現在は1：13.3にまで拡大している。また、日本の大学生の約8割は私立大学の学生であることに伴い留学生もその約8割が私立大学の学生となっており、これからも私費留学生の多くは私立大学が吸収していくことになるだろう。このような現状から、私立大学に通う私費留学生にとっての日本留学の意味を明らかにすることは、今後の日本の留学生受入れ政策の方向性や、多くの私費留学生を受け入れている日本の大学にとって、有用な示唆を与えてくれるものと思われる。

そのような、個人の意味世界を捉える研究の一つとして「時間的展望」研究というものがある。時間的展望とは、「過去、現在、未来を生きる個人の生きる意味を理解することを目指す研究（都築・白井，2007，p.8）^[1]」である。これは、その人間個人の人生観や価値観には過去についての評価、現状についての認識、未来についての決断などが含まれているという考え方に基づくアプローチである。過去に体験したことや未来に予想されることは、「現在」の生活空間の中で意味を与えられて組み込まれる。つまり、過去も未来も現在の「場」を構成する要素として構造化されるのである（小野・五十嵐，1988）^[2]。したがって、大学在学中の彼らの時間的展望を捉えることは、現在の「日本留学」の意味を明らかにすることにつながると考

えられる。そこで本稿では、私立大学に在学中の私費留学生の時間的展望を明らかにし、そこから導かれる「日本留学」の意味を検討する。

2. 「時間的展望」という研究方法

(1) 「時間的展望」とは

本研究では、留学生自身の考える留学の意味を探る方法として時間的展望研究という方法を用いる。時間的展望研究は人間行動の意味の理解のための研究である。レヴィン (1951/1979)^[3]は「ある与えられた時に存在する個人の心理学的未来および心理学的過去に対する見解の総体 (p.86)」を時間的展望と呼んだ。また、白井 (1997)^[4]は「個人の現在の事態や行動を過去や未来の事象と関係づけたり意味づけたりする意識的な働き (p.14)」と定義している。

個人の過去・現在・未来に対する意味付けをなぜ研究するのか。その点について、都築・白井は、人間行動の意味の理解のために時間を導入することで、1) 時間の中のある一つの局面における個人についての人間把握、2) 「人生」を生きる個人を総体として捉える人間把握、という2つの点から人間行動を捉えられると述べている (都築・白井, 2007, p.7)。前者は、現在の行動の意味を過去または未来との関連で理解することである。後者は、その人の人生観や価値観がどのような過去の経験に基づいているのか、また、それがこれから先の未来の行動をどのように方向づけているのかという、「人生」の時間の過ごし方からその人の人生における意味を捉えようとすることになる。このような時間的展望の概念は、留学生にとっての「留学の意味」を探るのに適していると思われる。それは、時間の中のある一つの局面、つまり、大学在学中の今という局面における留学生個人についての人間把握をすると同時に、留学という経験を含んだ「人生」を生きている外国の若者個人を総体として捉えるという側面からの人間把握が可能になるからである。

(2) これまでの大学生に対する時間的展望研究

時間的展望研究は心理学研究であるため、大学生に対する研究も「発達」という視点からの研究が多い。つまり、青年期におけるアイデンティティの達成との関連で論じられるものが多く、特に進路選択や職業展望に係る研究 (都築, 1993^[5]; 奥田, 2004^[6]など) や、大学生の学業をめぐる文脈からの研究 (溝上, 2001^[7]; 尾崎・上野, 2001^[8]など) が多い。しかし、進路の決定や学業の達成は大学生が必ず経験するものであるのに対し、「留学」というイベントは誰もが必ず経験するものではないためか、日本人・外国人であるかに関わらず、留学経験者の時間的展望を明らかにした研究は管見する限り見当たらない。

(3) 時間的展望を捉える方法

時間的展望の測定方法には量的方法と質的方法とがある。従来の多くの研究は時間的展望の長さという量的な側面に関連し、影響を与えるのはどのような要因かというものが多かった。しかし、都築 (1982)^[9]は「ある個人が自分の人生においてどのような内容の目標や希望を思い浮かべ、それにいかなる意味付けをしているのかという、時間的展望の中身を明らかにすること (p.80)」が重要であると述べている。それは、質的な時間的展望研究に求められている課題である。

本研究では質的な方法を用いる。それは本研究が、個人の意味付けを明らかにすることが目的であるからである。さらに、予め質問項目を定めた上で評定尺度を提示して回答させるような方法は、外国人留学生対象の調査には向かないという理由もある。それは、質問項目の内容を調査者側の意図したような内容として十分に理解可能かという日本語の問題や、調査内容に関心が低い場合はあまり深く考えずにすべての質問項目に対し、同じ評定を選んでしまう傾向が留学生にあるためである。以上のような理由から、本稿では質的な方法を用いて留学生の時

間的展望の様相を明らかにすることとした。

時間的展望研究における質的方法はサークル・テストのように図形を描かせるもの、物語を話させたり文章を書かせたりするもの、人生の出来事を挙げさせ時間軸上に配置するものなどいろいろな方法があるが、本研究では外国人学生にとって言語的な負担感が少なく、調査に煩雑な手続きのないものとして「文章完成法」を用いることにした。

3. 調査方法

(1) 調査手順

本研究では白井(1997)が開発した文章完成法による時間的展望の測定を行う。これは、①「私にとって未来とは……」②「私にとって今とは……」③「私にとって過去とは……」④「過去、現在、未来のうちで私にとって一番大切なものは……です。なぜなら……」という4つの文を完成してもらうというものである。このような文完成課題は日本語教育でもよく行われているので、留学生にも馴染みが深い。また、このような短文レベルなら日本語力の高低によって回答に差がでることもなく、記述する部分も多くはないので留学生にとってはさほど負担にはならない調査であると考えた。

また、白井はこの文章完成法を用いて、日本人学生の時間的展望を明らかにしている。同じ調査を留学生にしてみることで日本人学生との差異が明らかになれば、それは生まれた国にずっといる青年と外国へ移動した青年との差異と考えられ、その差異の意味について検討することで、「日本留学」にはどのような意味があるのかを理解することにつながると考えた。

よって、本研究では①文章完成法により留学生の時間的展望を明らかにする、②その結果を白井の日本人学生調査^[注1]結果と比較する、という二つの方法から、留学生にとっての日本留学の意味を検討することとする。なお、②の方法としてはカイ二乗検定^[注2]を用いてその有意差の有無を検討する。有意差の基準は基本的に

は5%水準だが、1%水準で有意である場合は「高度に有意」と表記する。

(2) 調査対象者

4年制私立大学の学部在籍中のアジアからの私費留学生を対象にした。調査時期は入学直後ではなく、大学生活にも慣れてきた2年次後半から3年次前半の時期とした。この時期は留学生としての生活も軌道にのり、4年間で卒業できるという見通しも立ち、同時に、大学卒業後の進路を考え始める時期である。次の進路を考えることは、過去の自分や経験を振り返りつつ、それらを再解釈し、同時に未来の自分を思い浮かべると意識を伴う。それはつまり、過去や現在の自分から将来を展望するという行為であるため、この時期に焦点を当てることは時間的展望を調査するには適していると考えた。

調査は2010～2011年にかけて行い、59名から回答を得た。国籍は中国が最も多く、49名であり、その他は韓国3名、マレーシア2名、ミャンマー2名、台湾・タイ・ネパールが各1名であった。国籍のバランスとしては中国人の割合が高くなっているが、現在日本にいる私費留学生のうち7割が中国人であることを考えると、サンプリングとしての妥当性は確保されていると判断した。

4. 調査結果

本研究で用いた文章完成法は時間的指向性及び時間的態度という2つの種類の時間的展望を捉えることができるものである。白井の定義によれば、「時間的指向性」とは過去・現在・未来の相互関係についての信念体系によるものの、過去・現在・未来の重要性の順序付けのことである。また、「時間的態度」とは過去・現在・未来に対する感情的評価、あるいは、将来または過去の事象に対する肯定的あるいは否定的評価の総体である。さらに、白井は時間的指向性には表1のように5つのタイプがあると述べている。

これらを踏まえ、以下では留学生の時間的指向性及び時間的態度についての調査結果を示しながら、白井(1997)で行われた、日本人学生に対する調査結果を合わせて示していく。

(1) 留学生の時間的指向性

表2の通り、留学生は最も重要なものとして現在を選択する者が8割を超えていたことか

ら、彼らは「現在指向性」をもっていることが明らかになった。日本人学生では次いで未来を選択する者も2割ほどいたが、留学生の場合は15%を下回った。

次に、現在を選んだ48人の理由について、白井の分析枠組みに基づいて分類した結果が表3である。現在を選んだ理由は「連関」「閉塞的」

表1 時間的指向性のタイプ

どの時間を重視するか	時間的指向性	意味
未来	ポジティブな未来指向	現在との結びつきがあり、未来の視点から現在に作用を及ぼす未来指向性
	ネガティブな未来指向	現在と切り離され、現在に作用を及ぼすことのない未来指向性
現在	ポジティブな現在指向	未来との結びつきがあり、未来に対する現在の作用が考慮される現在指向性
	ネガティブな現在指向	未来と切り離され、未来に対する現在の作用は考慮されない現在指向性
過去	過去指向	現在や未来とも切り離された過去指向性

(白井, 1997, pp.56-57より筆者作成)

表2 最も重要なものとして選択された時間

選択項目	白井の日本人学生調査	今回の留学生調査
未来	84人 (21%)	8人 (14.9%)
現在	303人 (76.2%)	48人 (81.4%)
過去	11人 (2.8%)	3人 (5.1%)
合計	398人 (100%)	59人 (100%)

表3 最も重要な時間として現在を選択した理由

理由	意味	白井の日本人学生調査	今回の留学生調査
連関	未来は可能性であり、それを現実化させるのは現在である、現在を頑張ると未来もよくなるという考え	156人	32人
閉塞的	未来はわからないし、過去は変えられないという考え	45人	8人
即自的	今のことしか考えられない、今を精一杯生きるなど、未来との連関には触れられていないもの	102人	8人
計		303人	48人

「即自的」という3つのカテゴリーに分類され、それぞれの意味は表3の通りである。そして、留学生の記述内容がどのカテゴリーに当てはまるかを判断した結果、「連関」が最も多いことがわかった。

白井は日本人学生の時間的指向性とその理由の記述内容を整理した結果を図1のようにまとめている。これは先に示した表1を、実際に日本人学生が記述した選択理由に基づき整理し直したものである。

図1に基づき表3の結果を改めて捉えると、留学生は「ポジティブな」現在指向性を持つ者が多いということが明らかになった。また、カイ二乗検定の結果は、 $\chi^2(2) = 5.69$ で $p = 0.058$ であった。5%水準では有意ではないが、わずかに0.05を上回っているだけなので差はあると考える。よって、留学生は日本人学生以上にポジティブな現在指向性を持っていることが示されたと考える。そして、「現在」を選んだ理由の中でも「連関」、つまり「現在を頑張ると未来もよくなる」という記述が多かったことは、未来は「可能性」であり、それを実現できるかどうかは現在にかかっているという展望を持つ

ていることを示している。日本人学生で「連関」の次に多かった「即自的」な理由、つまり、現在を未来とは切り離して捉えようとする姿勢は留学生には少なかった。また、ネガティブな現在指向性である「閉塞的」な理由を書いた者も少なかった。

(2) 留学生の時間的態度

白井は日本人学生に対する調査結果から、過去・現在・未来に関する時間的態度の次元と、それぞれがどのような内容的側面を持つのかを整理した。その結果、図2のように、未来は2つの次元、過去と現在は1つの次元で捉えられることが明らかになったとしている。

留学生はポジティブな現在指向性を持っていることは先に明らかになっているので、以下では未来と過去に対し、留学生がどのような時間的態度を持っているのか、白井の日本人学生調査の結果と合わせて提示する。

① 未来に対する時間的態度

白井は未来に対する時間的態度を「希望vs不安」という次元と、「目標指向vs予測不可能」という2つの次元で捉えられるとした。まず、「希望」「不安」という記述内容を書いた結果を

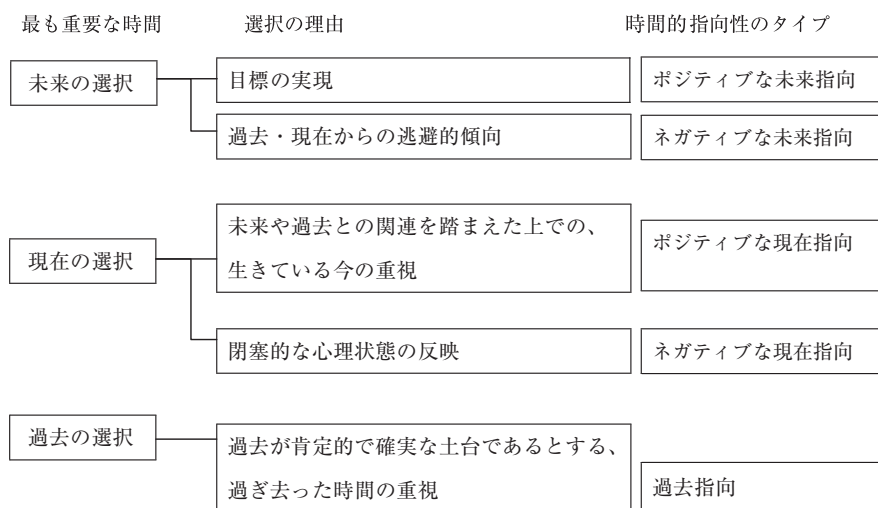


図1 時間的指向性のタイプ

(白井, 1997, p.103より引用)

表4に示す。

日本人学生も「不安」より「希望」が多いことは同じだが、未来を「不安」と捉えている留学生が皆無であったことは注目に値する。カイ二乗検定の結果も、 $\chi^2(1) = 4.35$ $p < .05$ と有意差があることを示している。

次に「目標の実現」「予測不可能」という記述内容の結果を表5に示す。

この次元では、日本人学生・留学生ともに未来に対して「予測不可能」より「目標の実現」という内容を記述した者の方が多かったが、カイ二乗検定の結果は $\chi^2(1) = 7.64$ $p < .01$ と、高

度に有意差があることが示された。つまり、未来を「目標の実現」とする時間的態度は留学生の方により強く表れているという結果であった。

②過去に対する時間的態度

留学生の書いた「過去」についての記述内容は表6のようになった。

白井は過去に対する時間的態度の次元を「受容 vs 後悔・無関心」で捉えているが、その2つの調査結果は日本人学生と留学生では著しく異なっていた。すなわち、過去については日本人学生は「後悔・無関心」よりも「受容」が多かったのに対し、留学生は「受容」13人に対し、「後

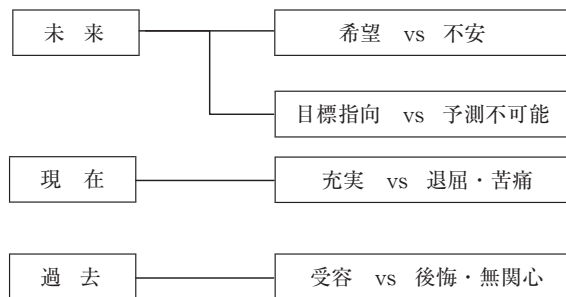


図2 3つの時間における時間的態度の4つの次元

(白井, 1997, p.114より引用)

表4 未来に関する自由記述の内容①：「希望vs不安」

記述内容		白井の日本人学生調査	今回の留学生調査
希 望	未知の世界、願望（～したい）	133人	16人
不 安	暗い、死、考えたくない・考えたことがない、思い通りにならない、戦いの場	37人	0人
合 計		170人	16人

表5 未来に関する自由記述の内容②：「目標の実現vs予測不可能」

記述内容		白井の日本人学生調査	今回の留学生調査
目標の実現	現在の結果・続き、目標や夢の実現の場、経験を活かす、自分の力で決められる、結婚・就職など、現在を意味づけるものとしての未来	102人	35人
予測不可能	わからない、遠い先のこと・空白の時間、不確実・漠然としている・無、瞬間	55人	5人
合 計		157人	40人

表6 過去に関する自由記述の内容

記述内容		白井の日本人学生調査	今回の留学生調査
受 容	思い出・なつかしいもの、大切なもの、今の私の支え、私の歩んできた人生、振り返ってみたい	193人	13人
後悔・無関心	反省、暗い・失敗、空白、意味がない・関係ない、いつの間にか終わった、瞬間	60人	27人
不可逆性	もう二度とかえらない、どうにもならない・仕方がない、振り返ってはならない	32人	5人
連 関	現在につながるもの・教訓、未来への基礎	47人	7人
両 価 的	～であるが、～でもある	19人	2人
合 計		351人	54人

悔・無関心」は27人と逆の結果となった。カイ二乗検定の結果でも $\chi^2(1) = 31.72$ $p < .01$ と高度に有意差が認められた。つまり、留学生は日本人学生に比べ、過去に対し「後悔・無関心」という時間的態度をとるものが有意に多かったということが明らかになった。

5. 留学生の時間的展望の構造

本研究で明らかになった大学学部私費留学生の時間的展望をまとめると、まず最も重要だと選択されたのは「現在」であり、その理由は「連関」、つまり「現在を頑張れば、未来もよくなる」というものであった。それは「ポジティブな現在指向性」と判断された。また、過去については「後悔・無関心」という時間的態度を持つ者が多かった。そして、未来は「不安」ではなく「希望」であり、「予測不可能」ではなく「目標の実現」という次元で捉えられていた。

ここで、回答した留学生にとって、過去・現在・未来がそれぞれの人生のいつの時点、または期間のことを想定していたのかについて検討しておく必要がある。まず、現在は日本留学中の現在、つまり、日本の大学で学んでいる「いま」であると判断してもよいだろう。では、過去や未来というのはいつ頃のことを想定して回答したのであろうか。

この点に関し、大学生の時間的展望を調査し

た小野・五十嵐は、青年にとって時間的展望を区切る重要なイベントは学校生活であること、また、青年たちの未来展望は意外と短く、大学生の未来は卒業後の就職など近い将来を焦点としていたことが明らかになり、青年にとってはるか先の未来のことはまだはっきりとした像を結ぶに至らないのだと述べている。留学生の年齢は日本人大学生より多少は上であるが、学生という身分であることから日本人学生と同様に青年期後期と捉えると、留学生の想定した未来は大学卒業後の自分を考えていると見做すことができよう。また、過去についても、日本留学という人生にとっての大きなイベントがその区切りとなっていると考えられる。よって、本調査における留学生の時間的展望の過去は「留学前」、現在は「留学中の今」、未来は「大学卒業後」という構造であると考えられる。

以上のことを統合すると、彼らの時間的展望は図3のように図式化できよう。

6. 留学生の時間的展望に基づく日本留学の意味の検討

本研究の調査では、留学生が「現在を選んだ理由」と、過去や未来に対する時間的態度はいずれも日本人学生の調査結果とは有意差が認められた。これらの結果から私費留学生にとって「日本留学」はどのような意味を持つものと捉

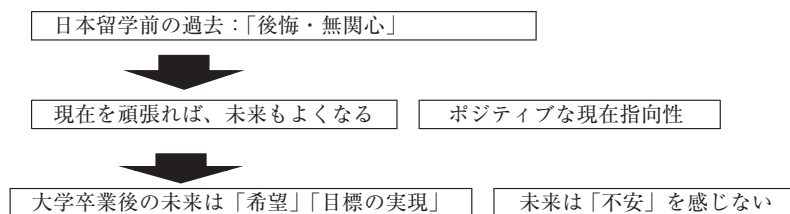


図3 私費留学生の時間的展望の構造

えることができるだろうか。

(1) 「ポジティブな現在指向性」であることの意味

本調査で留学生が「ポジティブな現在指向性」を持っていると判断したのは、最も重要な時間として「現在」を選んだ理由が「連関」、つまり未来や過去との関連を踏まえた上で生きている今を重視していることによるものである。日本人学生も「連関」が最も多かったが、その一方で「閉塞的」「即自的」な理由を書いた者もあり、その結果において有意差が認められた。つまり、留学生は日本人学生以上に「ポジティブな」現在指向性を持っていることが示された。この意味を考えるために、まず、「現在指向」であることには、「未来指向」に比べてどのような違いがあるのかについての先行研究を示す。

園田 (2003)^[10]は大学生の時間的指向性と進路決定に関する自己効力感の関係を検討した。その結果、未来指向は効力感と有意な相関があったが、充実感とは相関がなく、その一方、現在指向は充実感・自己効力感の両者とも有意な正の相関があることがわかったと述べている。それは、現在何かに集中して取り組むことが進路を選択するための自己効力感を高めるということを示しており、つまり、現在を重視することは現在の充実感にも将来の進路決定にも肯定的な役割を果たすことが示されたのである。

この知見に基づけば、留学生が日本人学生以上にポジティブな現在指向性を持っているとい

うことは、現在指向の日本人学生以上に充実感も自己効力感も高いということが言えよう。それでは、なぜ留学生は日本人学生よりも高い充実感や自己効力感を持つようになったのだろうか。この点については、留学生と日本人学生の時間的態度の差異の検討と合わせて考えてみたい。

(2) 現代の日本人学生とはどのような青年たちか

本研究では、留学生の「過去」に対する時間的態度も「未来」に対する時間的態度も、日本人学生とは有意差が見られた。これがどのような意味を持つのかを考えるために、日本の大学生はどのような特徴を持つ青年であるのかについての先行研究を示す。

溝上 (2004)^[11]は1990年代以降の大学生を取り巻く環境が著しく変化したことが、現代日本の大学生の生き方に大きく影響していると述べた。大学全入時代や就職氷河期という社会的状況、バブル経済崩壊によって職業世界における大人の権威が失墜したこと、企業においても成果主義から「やりがい優先」「自己決定主義」へと移行したことなどから、この時代以降の大学生にはやりたいこと・将来の目標から出発する「インサイド・アウトの生き方」が求められるようになったと指摘した。それまではやりたいことや将来の目標といった自己の中身よりもとにかく、「より上級の学校へ」「二流よりは一流へ」といった学歴トラックやレールの質が青年の人生形成の基準になっており、言わば「外」を基準として「内」的世界を形作る生き

方であった（溝上，2004，p.70）。溝上はこれをアウトサイド・イン（外から内へ）の生き方と呼んだ。しかし、バブル崩壊以降大学生を取り巻く環境が大きく変わり、やりたいこと・将来の目標という「内」を出発点にして大人社会に入ろうとする生き方、すなわちインサイド・アウト（内から外へ）の生き方を迫られるようになったのだと説明している。

しかし、インサイド・アウトの生き方は難しいと溝上は指摘する。特に、自らの目標の実現場所や実現方法がわからず、わかっても踏み出せるかどうかは大きな問題だと言う。尾崎（2001）^[12]は大学生の将来の見通しと適応との関連を探るため、1998～1999年にかけて大学生調査を行い1,126人から回答を得た。その結果、大学生の約7割が「将来の見通しを持っている」と回答していたので、さらにそのように回答した学生の将来の見通しに対する理解・実行の程度についても検討を行った。そして、「将来の見通しを持っている」と答えた815名の内訳は、以下の通りであったことを明らかにした。

「理解・実行」=何をすべきかわかっているし、実行もしている 35.1%

「理解・不実行」=何をすべきかわかっているが、実行はできていない 45.6%

「不理解」=何をすべきかまだわからない 19.3%

（以上、尾崎，2001，p.179より引用）

尾崎はこの結果について、認知的には同じように将来の見通しを持っているという状態であっても、その意味付けは多様であったこと、単に将来の見通しを持っているかどうかだけではなく、それに対してどのような意味付けがなされているのか、それが現在の自己の在り方にもどのように関わっているのかまで含めてみていくことの重要性を指摘した。溝上（2004）はこの尾崎の研究結果から「大半の学生は将来の見

通しがあるのにそれに対して何もしていない。＜理解・不実行＞も＜不理解＞も見通し、やりたいこと、将来の目標が認識レベルで留まっており、リアリティある形で機能していない（p.177）」と現代大学生の特徴を指摘している。

一方、溝上（2008）^[13]は青年期の自己形成プロセスにおいては、自らの行為が社会や対人関係の中で反応（フィードバック）を受けることが重要であると述べている。「これが私だ」「この私で行きたい」という自己定義や価値が他者から承認され、社会に受け入れられることで自己形成が進むのだとしている。つまり、この個人と社会との相互確認のプロセスが青年期の自己形成には不可欠だと述べている。

このような青年の自己形成論に基づき、溝上（2010）^[14]では、前述の尾崎の調査の結果を踏まえ、現代日本の大学生像を以下のように説明している。すなわち、日本の大学生たちは認識的には将来のことをそれなりに考えるようになっていても、それは日常生活や行動に結びついていない、言わば頭の中だけの話となっている。そのことは、言い換えれば近年の学生たちの多くは将来の自己像を頭の中で描くだけで、その自己像を日常生活や他者との関係性の中で試す自己形成の活動を行っていないのだと言える。つまり、現代大学生の将来展望が日常生活や行動と結びついていないのは、自己形成に必要な社会的相互作用がなされていないということであると指摘した。

（3）留学生の「ポジティブな現在指向」の理由が日本人学生と有意差があることの意味

現代の日本の大学生がこのような状況であるとするならば、留学生の時間的態度が日本人学生の時間的態度と異なるのは、留学生が「留学」という国際移動のプロセスの中で他者との社会的相互作用を幾度も経験してきたということによると考えられよう。彼らは留学プロセスにおいて、ビザの審査を通過し、大学入試も乗り越えてきた。そして大学入学後、日本人学生

とまったく同じ授業を受け、日本語でレポートを書いたり試験を受けたりして単位を修得してきた。それは、すべて「他者からの承認」を伴うものであった。大学の外の世界においても、外国で一人で生活し、親に依存できない状況の中では、アルバイトの選択にしる、アパートの選択にしる、それらはすべて他者からの承認を伴い、その継続には他者との相互作用により社会に受け入れられることが不可欠だと言える。このフィードバックが様々な場面で経験されたことが両者の差異として表れたのだと考えられる。

また、例えば「入学試験に合格する」という経験自体は日本人学生も通過してきている。しかし、大学に合格できなくても日本人学生は日本にすることが可能であり、浪人という選択肢もある。それに対し留学生は、日本語学校にいられる1年半から2年までの間に進学できなければ帰国するしかない^[注3]。帰国したくなければいったん専門学校に入り、その後大学入試に再挑戦する道を選ぶことになるが、そうするとさらに時間と経費が掛かってしまうし、専門学校を卒業後再び大学を受験しても、合格できるかどうか分からない。したがって、実際の入試の難易度はどうであれ、日本の大学の入試に通ったことは、留学生自身にとっては非常に重要な「意味」を持っている。つまり、彼らの意味世界では「大学に合格したこと」は日本人大学生の意味世界での受け止められ方よりずっと重く受け止められ、それが強い自己効力感をもたらしていると考えられる。

このように、日本留学というプロセスにおいて大小いくつもの「他者からの承認」を経験したことで自己効力感が育まれ、「現在を頑張れば未来もよくなる」という「ポジティブな現在指向性」を持つようになったのだと考えられる。

(4) 未来に対する時間的態度が日本人学生と有意差があることの意味

留学生の未来に対する時間的態度が「目標の

実現」や「希望」であったこと、また、「不安」という時間的態度が現れなかったことは、それまでの日本留学経験においてこのように自己効力感が育まれたことを示唆するものである。そして未来に対しては、日本人学生は自己効力感が高まっていないことから、「不安」や「予測不可能性」という時間的態度を示すのに対し、留学生にはこれまでの日本留学での効力感により、そのようなネガティブな未来への態度が表れなかったのだと考えられる。このように、留学という国際移動プロセスの中で、留学生が経験した社会的相互作用は、その量・質ともに日本人学生とは有意な差があるということが、留学生の時間的態度と日本人学生の時間的態度との有意差に表れたのだと考えられる。

(5) 過去に対する時間的態度が日本人学生と有意差があることの意味

一方、過去に対する時間的態度では留学生は日本人学生に比べ「後悔・無関心」という次元が有意に高かった。留学生が想定している過去は日本留学前であると考えられることから、このようなネガティブな思いは日本留学前の自分の状況に対する態度だと推測できる。そこで、留学前の彼らはどのような状況であり、どのような思いで日本に来たのかを日本留学動機に関する先行研究から示す。

浅野(1997)^[15]は中国人私費留学生42名に対し聞き取り調査を行った。そして、彼らの来日動機や目的は属性毎(在学学校別)に多様であると指摘した。私立大学の大学生の留学動機は国立大学の大学生と異なり、文化大革命等で阻害された高等教育を受けること、そして同時に中国を脱出して外国での生活を経験することであった。専門学校生は何よりも市民的自由の欠如した中国から脱出し、新たな人生・自己実現を模索しようと出国していた。浅野の調査した当時は、日本への留学には保証人が必要であった時代であり、日本留学に対する現在のような自由度はなかったため、日本に来られる条件が整った者が留学していた。そして、彼らが留学

を求めた背景には彼らを取り巻く中国の状況への不満があった。

葛 (2007)^[16]は20人の留学生に対する面接調査を行い、来日の目的を尋ねた。その結果としては、学位の取得や日本語の勉強のためという理由の他に、中国人留学生の中には「中国から逃げたかった」という理由を挙げた者もいた。また、「完全に人生の目標を失ってしまった自分から逃げ出したかった」と語った者もいた。さらに、「自分の将来を変えるため」と答えた者は中国にいた時の就職が希望通りではなかったと述べていた。

望月 (2007)^[17]は7名の中国人就学生^[註4]へのインタビューで彼らが本国においてある選択肢に進むことに失敗していたと述べている。それは例えば、自国で在学した大学から退学勧告を受けた、民間企業に就職したが肌に合わずに1年足らずで退職した、大学を卒業したのに就職できないなどの「ちょっとした挫折」であったと望月は指摘する。そして、それを「留学」によって克服しようとする明確な向上心を認めることができたと述べている。

以上のように、複数の先行研究から中国人留学生の留学動機に何らかのネガティブな過去が関わっていることが窺われた。留学動機についての質的な研究は少なく、中国以外の国の留学生についての詳細は分からない。しかし、本研究の結果において過去に対するネガティブな時間的態度が日本人学生との有意差として表れていたことから、「留学」という国際移動は外国人の若者が自国において何らかのネガティブな思いを過去に抱いていたことと関係があると考えられる。そのような過去をリセットし、新たな一步を踏み出したいという思いが日本留学動機に含まれていること、そして、将来の新たな可能性に向かって「現在」を頑張っているのだという態度が留学生の時間的展望に示されているのだと言うことができよう。

7. まとめと今後の課題

以上、私費留学生の過去・現在・未来に対する時間的展望を明らかにするとともに、日本人学生との比較から検討を加えてきた。ここから、彼らにとっての日本留学はネガティブな過去をリセットするための移動であると同時に、青年期の課題である、自己形成プロセスとしての国際移動であったと言うことができる。日本留学に係るプロセスには「他者からの承認」がなければ乗り越えられない課題がいくつもあり、それをクリアしてきたことが彼ら自身の充実感や自己効力感を高めてきた。これは私費留学生ならではの意味世界である。国費留学生の場合は日本に来る前から進学先は確定しており、留学中の学費、生活費、渡航費などの経済面や住居などの生活面のすべてにおいて日本政府からの提供を受けている。これに対し、私費留学生はそれらの一切を自らの手で一つ一つ解決していかなければならない。この経験が彼らの「留学」という生活空間、「留学」というプロセスにおける他者からの承認を認識する機会であり、その度ごとに留学生は「これでいいんだ」「これでいける」という自己効力感を育み、それが彼らの自己形成を進めてきたのだと言える。

彼らの留学に伴う様々な経験や他者との関わりは日本人学生も日常生活で経験していることかもしれない。しかし、例えば「アルバイトを見つけて働く」という経験であっても、外国人は採用してもらえないかもしれない、自分の日本語力では務まらないと言われてしまうかもしれないという不安を抱えた留学生が、採用された時に感じる充実感や自己効力感は日本人学生以上のものであろう。そして、そこで働き続けていくうちに仲間として認められ、その場の一員として仕事に貢献できるようになってきたときの充実感も、日本人学生が感じる以上に強いものだと思われる。このような、生活空間や意思決定における経験は、彼らの意味世界の中で価値のある

ものと意味付けられ、それらによって彼らの自己形成が進む、これが私費留学生にとっての「日本留学」の意味であると言えよう。

これまで、留学生を対象とした心理学的アプローチの研究は、日本という異文化における経験や、日本人との異文化接触との関連性から論じられるものが多かった。しかし、本研究では、彼らの成長は、異文化との接触という「文化」差に起因するものではなく、留学というプロセスにおいて自己と他者、それを取り巻く社会との相互作用の中で形成されるという側面を示すことができた。これは、「留学」という経験について、これまでの研究とは異なる視点からの捉え方の有効性を示せたと言えよう。

今回は大学在学中の留学生の時間的展望の調査を行った。本稿で検討した日本留学の意味をさらに確かめるためには、日本留学以前の彼らの時間的展望や、渡日直後の展望について調査し、その変容を明らかにすることが求められよう。ただ、現実的な問題として留学前の外国の若者に対する調査は難しい。一方、日本語学校の協力があれば、渡日直後の就学生に対する調査は可能である。今後はそのような機会を得て、留学生の時間的展望の変容から、私費留学生にとっての日本留学の意味世界をさらに明らかにしていきたい。

【注】

[注1] 国立大学教育学部の2～3年生、私立大学の1～3年生、および専門学校2年生の合計400人に対し行った調査。

[注2] 実際の計算はSPSS ver. 12を利用した。

[注3] 日本語学校は入学時期によって1年半コースや2年コースなど在学习中の期間が定まっており、それを越えて日本語学習を続けようとしても、入国管理局からビザの延長は認められない。また、在籍日本語学校を途中で変えた場合も合計で2年までしかビザは発給されない。

[注4] 就学生とは「就学」という在留資格をもつ外国人学生のこと。「就学」ビザは日本語学

校で学ぶ私費留学生に対するビザである。(2010年から就学ビザは留学ビザに一本化されている。)

【謝辞】

本稿の調査に協力してくれた外国人留学生の諸君に心から感謝申し上げます。

【付記】

本稿は2012年度日本語教育学会春季大会におけるポスター発表「私費留学生にとっての日本留学と仕事観-時間的展望からの検討-」を大幅に加筆修正したものである。

【引用文献】

- [1] 都築学・白井利明『時間的展望ガイドブック』ナカニシヤ出版 (2007)
- [2] 小野直広・五十嵐敦「青年期の時間的展望-TP-SCTによる考察-」, 福島大学教育学部論集, 44, pp.1-13, (1988)
- [3] レヴィン, K. 猪俣佐登留訳『社会科学における場の理論』誠信書房 (1979) (Lewin, K. *Field Theory in Social Science*, New York: Harper and Brothers, 1951)
- [4] 白井利明『時間的展望の生涯発達心理学』勁草書房 (1997)
- [5] 都築学「大学生における自我同一性と時間的展望」, 教育心理学研究, 41, pp.40-48, (1993)
- [6] 奥田雄一郎「大学生の語りからみた職業選択時の時間的展望-青年期の進路選択過程における時間的展望の縦断研究-」, 大学院研究年報 (中央大学) 文学研究科篇, 33, pp.167-180, (2004)
- [7] 溝上慎一編『大学生の自己と生き方-大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学-』ナカニシヤ出版 (2001)
- [8] 尾崎仁美・上野淳子「過去の成功・失敗経験が現在や未来に及ぼす影響-成功・失敗経験の多様な意味-」, 大阪大学大学院人間科学研究科紀要, 27, pp.63-87, (2001)
- [9] 都築学「時間的展望に関する文献的研究」, 教育心理学研究, 30(1), pp.73-86, (1982)
- [10] 園田直子「大学生の進路決定と現在指向」, 久留米大学心理学研究, 2, pp.63-69, (2003)
- [11] 溝上慎一『現代大学生論-ユニバーシティ・ブルーの風に揺れる-』日本放送出版協会

(2004)

- [12] 尾崎仁美「大学生の将来の見通しと適応との関連」, 溝上慎一編『大学生の自己と生き方－大学生固有の意味世界に迫る大学生心理学－』ナカニシヤ出版, pp.167-196, (2001)
- [13] 溝上慎一『自己形成の心理学』世界思想社 (2008)
- [14] 溝上慎一『現代青年期の心理学』有斐閣 (2010)
- [15] 浅野慎一著『日本で学ぶアジア系外国人』大学教育出版 (1997)
- [16] 葛文綺『中国人留学生・研修生の異文化適応』溪水社 (2007)
- [17] 望月春香「中国人留学生の目的意識とその変容過程に関する質的研究」, 応用社会心理学研究, 3, pp.16-40, (2007)

【参考文献】

1. 独立行政法人日本学生支援機構「平成20年度学生生活調査結果」, 『大学と学生』6月臨時増刊号, p.12, (2010)
2. 独立行政法人日本学生支援機構, 平成23年度外国人留学生在籍状況調査結果, http://www.jasso.go.jp/statistics/intl_student/data11.html, (2012.09.1)
3. 茂住和世「私費留学生にとっての日本留学と仕事観－時間的展望からの検討－」, 『2012年度日本語教育学会春季大会予稿集』, pp.253-254, (2012)